

## 抄録

生成 AI から Agentic AI(自律的に計画・実行する AI)への移行が、医療を含むあらゆる現場で急速に進行している。画像診断の補助、文献の要約、診療記録の作成、鑑別診断の提示、服薬指導の支援、看護記録の自動化、リハビリ計画の最適化において、AI はすでに熟練の専門職に迫る、あるいは凌駕する生産性を示し始めた。こうした状況下で、「自分たちの仕事は AI に代替されるのか」という不安が、医師、看護師、薬剤師、リハビリ職、検査技師、医療ソーシャルワーカー、医療事務 — 医療を支えるすべての職種に広く共有されている。

本講演は、この問いに対し、ひとつの逆説を提示する。すなわち、AI が進化するほど、最も人間的な医療の営みの価値はむしろ高まる、という逆説である。

鍵となる概念は「暗黙知」である。哲学者マイケル・ポランニーが提唱したこの概念は、「我々は語り得る以上のことを知っている」という洞察に集約される。熟練医が患者を一目見て「何かおかしい」と察知する力。ベテラン看護師が患者の呼吸や顔色のわずかな変化から急変の予兆を読み取る感覚。薬剤師が患者と対話する中で副作用の兆候を察知する勘。リハビリ職が手で触れた瞬間に把握する身体の硬さ・揺らぎ。検査技師がデータの背後にある臨床像を立体的に思い描く力。医療ソーシャルワーカーが家族関係の機微を察知する目 — これらは教科書にも論文にも記述されていない、身体と経験に深く埋め込まれた知である。AI が容易に代替できるのは形式知(明示化された知識)であり、暗黙知はむしろ学習データそのものが存在しないために、AI の最も苦手とする領域にとどまる。

本講演では、この多職種に分散する暗黙知と Agentic AI を対立させるのではなく、「組む(共創する)」関係として捉え直す。AI を観察者・対話相手・整理役・翻訳者として傍らに

置くことで、これまで継承が熟達者の身体一代限りに閉じていた臨床知の「周辺」を可視化し、若手スタッフの修練を支え、地域医療・人材偏在の課題に資する道筋が見えてくる。重要なのは「核心は人(医療チーム)に、周辺はAIに」という役割分担であり、責任・価値判断・信頼関係・身体的ケアといった医療の本質的領域を、多職種の間が担い続けることである。

さらに本講演は、これを個人の働き方の問題にとどめず、日本の医療が世界に貢献する戦略へと接続する。日本は世界で最も早く超高齢社会に突入し、臨床現場には世界トップレベルの暗黙知 — 医師の診断知、看護のケアの知、薬剤管理の知、リハビリの知、地域包括ケアの運営の知 — が、多職種にわたって厚く蓄積されている。これらを Agentic AI と共に「世界に届く形」へと翻訳する営みを、演者は「加工貿易 2.0」と呼ぶ。戦後日本が資源を加工して世界に届けたように、これからは多職種が担う臨床知という資源を、AI を加工機械として、世界の医療課題へと届ける — この構想と、それを担う「プロデューサー」という新しい役割について論じる。本講演の後半では、この実践の中から見えてきた具体的な成果と、医療現場のあらゆる職種が自らの暗黙知を社会的価値へと結晶化させるための、実装的な手がかりを共有する。

AI 時代に、医療を担う私たちは何を手放し、何を守るべきか。多職種それぞれが磨いてきた現場の知をどう次世代へ、そして世界へ届けるか。本講演が、日々患者と向き合うすべての職種の先生方にとって、明日からの臨床と教育、そして自らの経験の社会実装を見つめ直す、ささやかな手がかりとなれば幸いである。